内侍所歌合 康和元年十二月十七日

題

庭残菊　水鳥

恋久恋　祝言

松雪源

左方作者

如房 勝三負一 持一

関白 負三持三

入道前内大臣 勝一負一 持三

大宰権帥実雅 勝一持一 負三

左近権中将雅康 負四 勝一

武部卿親王 勝二 持三

右大臣 勝二 負三

権大納言公任 勝一持一 負二

左兵衛督雅兼 負二

前大宰大弐為房 勝三 持二

右方作者

准后 従二位 行二

右大將義政 従三位 行一

按大納言伝宣

治部卿宣空

兼大宰帥義蓮

左方従十四 行十六 負廿首

右方従廿首 持十六 負十四

講師

講師

右兵衛督為富

按中務卿忠雅

兼因大臣 従三位 行一 負一

兼大納言資任 行一 負三

按大納言伝従光

判者 左衛門督雅親朝臣

一番 庭梅 女房

左 従 左方歌 右方歌 勝

右 准后

あるはてうの歌ゝ歌ゝ

あるはてうの歌ゝ歌ゝ

をとこ所あひかたらひ

をとこ所あひかたらひ

ひとりてたりふ

ひとりてたりふ

ゆきとゝ仍左方勝

二番

危　関白

右　猪　右近大将義政

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三番

危　猪　武部少輔王

[illegible]

右　茶間大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四番

庵　右大臣

雲はれ上る嶺の道はかり霧わたる里もみえわかにし庭の白菊

右勝　沙弥浄空

ちかき色も露も見えすかしこに庭よりておのつからさしよするしら菊も鮮やかに雲はれたる入月とも見るさまかくかくしく
聞とまとも残菊はまた盛なる残あけゆくそらのほしまたゝくさまかも見えていと珍らしく
きこゆ　持といへる右は源氏の物かたりのおもかけみえかれの
巻の小菊をきこえてうつろひし物もてもてはやす菊と折
くさしくふりしことあはれなるやう持のさま

又菊

侍従小きこゆ給はさて為勝

庵　持

菊大納言正蒲意

庭の面も秋のさき倒し見かけてこゝ移ひゆくもの相の白菊

右

菊大納言正義蓮

遠ちかあひて雲かれ庭に見ゆると見の文と興小菊と詠かり

右も難なきはなとかれも古今集に

いりかゝらそこなる句のとくやうつろへるさき

くらへた物につけるもあかりしか見ゆる右

させることならしまさしに持れたりともあるらし

ちかをとかや

六番　危　勝

入道前内大臣

花をとさへしらぬ世にはなれ家の名をうしろ

右　前大納言資任

末葉ふさへうつることをもうる者のたに物をいはぬ庭の白菊

をとこ山しらぬ花ゆかりのうるはしなる

をしまれぬ末のくさへはまれるをさへのつやもある

花ぬすびとよりおりしをうしろ見てとはぬ

末のくるまをうらんん

七番　危

ふる代ぬべき花のすがたの翁ちのらも句ふまを菊

右　勝　右兵衛督雅親

菊はさうの色も白ひる者はなるれ世の庭

をとこ庭のうをとをうるしの中とのをたりひて

その門をもとめぬ花者のはうまつをるよや

ちしをの下に秋風ふるつをおしく笑

八番

八月十五夜

右宰相中將実雅

おもかげにやどるなみだのあきのつきはらはぬ袖にくもるかな

右

前大納言為光

ちぢの秋のあはれをとどめるおもかげにやどるなみだのあきのつきかな

ながめこしこのつゆやはきみがためいとどあはれをそへてこぼるる

ゆくすえはいかにかはしらねどもこよひのつきのあはれなりけり

白妙のころもかさねてうちしきてこよひのつきをあかしてしがな

なにとなくあはれをそへてこぼるるはこよひのつきのなみだなりけり

九月

左衛門督

前大納言公綱

ながめこしこのつゆやはきみがためいとどあはれをそへてこぼるる

右

白妙のころもかさねてうちしきてこよひのつきをあかしてしがな

前大納言親通

右　ことばのうつりかはりにもまさる風流の面白さ

のこりなくさかりにゆるしつるかぜにうつりかはるこのはのいろ

ながめこしこのつゆやはきみがためいとどあはれをそへてこぼるる

今集にこの歌秋乃果とはおもしろき

ぬれてひにほしあへぬ袖にこのはのいろいろにうつりかはるかな

つゆにぬれてこのはのいろいろにうつりかはるかぜにこのはのいろ

ながめこしこのつゆやはきみがためいとどあはれをそへてこぼるる

ながめこしこのつゆやはきみがためいとどあはれをそへてこぼるる

とりあらしてはと縁すぎ行ん

十番

右

右近権中将雅康朝臣

物まうでの人めをうれぬ蔭くさく移ふきたれるのまうきうり

右 縁

うりつくもまつ雨ぬらす紅葉の白菊

もとすすひとへに移ふきくとはこそ思ひて物まう

こと葉の花人先うせぬうつりゆくしるしとかなへ

思ひなとといふまてやおほえ侍る右方勝とも

ふうらぬるすてをしら勝をるへし

十一番 水鳥

右

右兵衛督雅親

月ふかう池の玉藻の底のうへまはやとすれうつる

右 縁

前大僧正義運

河やしきゆくと池の面のうきすの鴨のとをたちるこゑ

もとすすめはしらくはたのこの小夜ねうるまもまも

河やこほるるこゝろをさうゆく志賀の浦なみ

あるこすはなりへうるやうや流と池かうしの浪のとこ

ちとり丸多かうるうるうて年こすすれ

ていとうとすやはうん家潮はこをわかて

いつる所の月をたゞ見るあるまゝに北
風ふきはらいたるそらはかすみはらしに

十二番　　太宰權帥實雅
右

閑居雪消　　沙弥淨空
氷ゝ友なきをゝ北地ひとりたのむ入江の
さゝ波させるこゝろ雅もきゝ侍るぬやな
小雪ゝ小町うゝびぬまの水鳥のこいへる
こゝろとゝまるをゝ侍るゝきゝ侍れど後成は

如さゝ閑居ひけるとはとゝ侍るも
撰集よりゝ侍るゝしまやかれさるひとゝは
ゝ閑居を侍るを

十三番　　入道前大臣
右

あゝ鶯のはるゝ入れるゝ氷ゝけゝぬ水のゝ
ゝ侍るゝ　　雅房
鶯ゝゝゝれゝゝ侍るゝ我家の池ゝ侍るゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

しんとしてつちしらいく石の海面
代よりふるこれ行もしらぬ
くせしまたるつちさしらいまとこ弁
さま侍ふ所へ
あしらん

十四番

左勝

武部四郎重

おりふしの友、雲、庭のさくらも取たくまくやなくらむ
右、
池水まつ心ぬとも北斗はすきぬのくけとやなる
捨ぬ須部忠雅

十五番

左

もとまつ海とやなくらむ
くれなゐ
なつ
紅葉
左勝

女房

右近大将義汝

右

東くしの時のあひのいろ
さ
秀逸のすくなる續拾遺集よりさしき

乃しも夜の袖のなりかはるなれこそ乃
をれひとり孤こ伝るよやしうしかも撰集
うそつりうそ今れせる同詠をうそうそ
雑部より伝るうやんれ平家を集れ右
閑ちり出るそうそうするとまとはるうきうる
ところも可有歟

十六番

左 勝

歌はそうそう庶し定ぬ水をいらぬ方と為てやはく

右 兵部卿為富 一

歌大伝正滴意

うきうすしるも定ぬ閑ふく浦まちうう海の水鳥
右方もはるうそうそ世之うう閑ぬけいうも
さうめそといへるこ句とそれるやう左庶も
定ぬもうの小のうう山ひ伝まとこ有らぬまと
主門めるハいうすまうしうまうう

以左為勝

十七番

左 勝

そうひえぬを知てまあ流水をいとく浦ぬとや明

右 撰大納言釈通

雅康朝臣

いつまでの成そこひとろなく水鳥のうかれ出るとて
右兵部卿集より此詠のとしのうきを初とあれ
なるふるこもれしるこの水しやらひ
行ぐ〻せそやとそくきかるゝ勝行るし

十八番

尼

撰大納言公綱

友鹿もそろ鹿原ゆふのちやまくに物へそそとやなん

右

右大納言実任

ちるを秋の池の水とゆるこそきしをるこの志はき紅葉

尼上白不便右下白年懐也勝劣無

変元

十九番

尼

右大臣

山水の落ちるまのもうこ井ゆ川瀬の響ゆこう也海

右勝

花門大長

冬川やこほるもく流ゆ日ゆ見るあきはの色の深さ

さ不廣葉不行り右千代ゆ成あるこうこ

勝へきこうや

二十番

尼

開白

芦原や霜しらさやかれ行風とおきねの鳥はたゝ

石清水　　権大納言殖光

芦鶴は春日の山の雪ふりて山川の水ぞ氷ゆくめる

ふるさとの芦の葉ぬれて夕風に鶴の声ぞ霜にまがへる

ながめやる芦の葉ぬれて夕風に鶴の声ぞ霜にまがへる

つれなくて芦の葉ぬれて夕風に鶴の声ぞ霜にまがへる

芦の葉ぬれて夕風に鶴の声ぞ霜にまがへる

さしもとのこゝろやうるまや弁はてゝ侍ふしも

きゝとゝんすかうひきはなうちさゝやくハ

あるかへし

二十一番　松雪深

武部の親王

風雅

ゆきのうちに松はいとゝ色まさりあるかなきかの雪の下枝

右近大将義政

雪のうちに色まさりける松の枝はもとの下風にさきのこりたる花のなごりにおなじくしてたゝ雪をとゝのへ似るこゝろ

ふるさとの雪にとゝ六百番歌合に富士の雪とこゝ

ふるさとの雪にとゝ六百番歌合に富士の雪とこゝ

やたゝゆるとゝ六百番歌合に人判者とり小雅を以

方丈雪乃下折いつまたらてとあんを作る法
行とゝへくゝや

二十二番

左 持

雪とはへらし丸雪きまあくゝふさくいくゝはりるはき丸白雪

右

花にまれるこひしのまみえて行方をしらぬ心もくゝ雪

左 歳寒負松色

ゆきこゝ雪のはらくゝとまとめ

うくゝくゝ白そとくきくゝ作る右方題丸

つとくくしくこゝもゝ作るこのゝ不とくなる

二十三番

左 持

吹くゝる嵐もとゝめき山雪の雪ふくゝふゆき丸ちり

右

はきてゝ嵐の雪丸雪小山川後とゝ後丸

とゝ年あくゝくゝとゝりきを作る雪恵不思議

山雪も優かくゝもきとゝくゝとゝや右方も雖ゝ

くゝくゝ作へきこゝもくゝくゝとゝ

すゝきこゝゝや

二十四番

左 持　　権大納言公総

さえかへる松も音せぬ夜あらしにおもき雪のふかき窓かな

右　　右兵衛督為富

さらぬだに雪も今はやはらぐにふかき夜ふかき庭のしら雪

左右ともに等同にして無勝劣

二十五番

左　　雅康朝臣

吹わけし嵐もさえて積る雪の枝

右 勝　　権大納言勝光

深雪さへ嵐ふきそふ袖のうへに降つもる雪のふかき窓

右歌首の并松のあらしにおもきものとする風情

まことにありがたくきこえ侍れば勝と申べし

きこえ侍る左歌もいかにもよろしくこそ

とりわき侍るはいかなるいさぎよさかな

たくひなかりける

二十六番

左 勝　　右大臣

ときはなるあらしの枝にも雪ふかく積りつもる松の白雪

右　　権少僧都忠雅

はま近き浦の松山うつりけり秋まてやこゝにゐる風の波
右の歌うらちかく浦くるかゐなくこあらなまし
入ゐひとくしくさゝや左歌まさるへしつよく心の巻
てし松のまれゆのれとおきうつまゝさとこ
はるかなるかくあるも松は見えくらされは其心の
遠山のつさへうてうまこすまて右はまさるまし
とくるかを

二十七番

左 持

くもひらけたるく稲も宿とちて松なる山より新月見えし

右宰相卿実雅

右 前内大臣

ゆふ日影しはしとゝまれ峯の雪きえせぬ松をたつぬいそふる
あま新嶋の雲はれる空ところならつゝみて
きえても時しめれありしそ風かくてはいり
こゝろ雅りやさおほえ佳也とこれはうち
ちるみつまこ作るやさてもありぬへし
右歌をも強しく見え佳れは為持

二十八番

左 持 入道前内大臣

あまのこは里近くて池みえうこまも松乃見えゐる

第大僧正義運

右

くるひなのいとへらのかきをあらはせるとも嵐の
人をも千世乃かけの松高ふうつりもてゆ
みのの色をうつす水底ふかくあらはし
作り右千松と志ゑ所わ〻し小又後夫
なをも孫よく所しる松ま不作

二十九番

左

左勝　雅親

四条宮松尾の社の社のあるかの神の雅
右勝　雅信

あらし吹ぬ嶺のあらしやたかくとも高砂の
を松乃をのちりうをたしてとい
ちりてくちるとはたゝ後ふしも作
さた高砂の松小すもはるのゝ霞ゆれ
ひとくるつかうしくるうへ右れ作
ゆくへ作るへし

三十番

左持　女房

あしこ尾これるのひとゝ
右　沙弥浄空

ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ

危白雪一村石蓋海子歌　欲神仏甘心腸苟不分明

三十一番　悪久忠　　石大臣

危　儀

人をとゝとゝれば　はりはり　年ぬしとおかけくる

石　　前大納言賀茂

我才さへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ

たゝ白ゐれ　ものもとめ　やあらん　ゐるて

き年　序のつるゐ　とゝとゝ　ひとしとて

たけくらひさまあくて　ゐるまは　可為儀

三十二番

危　　雅康朝臣

我と　ゐる　吉川の　ゐまを　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ　ひろまへ

石　儀　　惟喬

ひおりゐ　神さ　るまを　ゐまは　ここし　ゐれと　ゐる　ゐ

ちるへ　ハ雑面　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]の謹和と作るべし右
[illegible]巻下[illegible]婚姻中文[illegible]
[illegible]
繪詞巻巻[illegible]
[illegible]や危ハ右賞[illegible]
三十三番
危 右 太宰権帥実雅
[illegible]
右 権大納言親通
[illegible]

[illegible]
[illegible]
三十四番
危 右 武蔵守親定
[illegible]
右 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

侍るやうにもいひくだされ侍るにも左
ハ艶なるにこそみ侍れ右ハさはくなるにやとお
ぼえ侍るにや勝劣さためかたし

三十五番

左　関白

うち出るかひこそ花海のくまひまも侍らし袖もうらやまし

右勝　右兵衛督為冨

うき身はたゞこそ我ハいかならん袖の外ハなみだぬれこそ
ちか出るなみださこそかけるより下句こそあし
右ハ家のやさしくえん侍る左ハさにといへる詞
ことば殊なく侍也と題のつゞきもおかしき由
可勝也

三十六番

左勝　女房

あらきなかくはりるおりひも天地世ハ聞えたる音と思えん

右　前大僧正義運

今はゝびそん名もうしいはまくも恐ことなかれかまくら
世間のおりひとうけそこの世をいろまで
かとくろしくて右も雖及きてこれを
なき風ひとへり為勝

三十七番

左

右 勝

左近大将義政

重ねとはきてうちまきをそなへられたりしかは

をこの事おのれなりけれはきつとりてを

のそるこそうまとてもくまてもなを弁をとも

はうちまきをはしとはなるはうちまきとはうち

乃こそやしのおれをれ年弁はいつてを

妖歌なりをこそなるかの不為勝

三十八番

左

従大納言公猷

右 勝

拾遺都忠雅

はくこうの八幡宮のこうなりひ川なるれての世れ海名ひるま

なりへとるいとうきをひとはなくなるよつをれる流とをとる

をを白河とて流しをはきてれををのけふ

ことををといへる弁をとををるるや雖るをまをも

可為勝

三十九番

左 勝

従大納言正通意

あらせそや今ハつも月見ぬとはなりてぬ　花大納言勝光

右

こけぬへきつゝ人ハ[illegible]ていくら月を思ひきるもむ

右　[illegible]つのハ[illegible]

いくそまはしくそ俗者こゝろ[illegible]

おりしやもぬとそ[illegible]

とりしるなくしてあつ[illegible]

[illegible]

四十番

尼

入道前内大臣

右　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四十一番　祝言

尼　[illegible]

女房

[illegible]

右

今をる和代とおもふ身光ひかりとなりぬ右の歌

危　此伝之不及とろもの為

四十二番

危　持　光大僧正浦意

大内やまかくしまいはるこの法のちかしい右の歌代

右　此詠浄空

きたかるの世かしらはるを者ても世の教とも給

ひこ二るの水居しふかくきたるを代乃

寶生等とおもふ法乃ちかしたのしい右又

巻のこころをあらはしまこと世ふかくこころ花見び

そそやまのまちつのちかくこしはふかく

ものの為方とおもふくこしはふかく

四十三番

危　持　式部卿親王

ちかの為やこれぬ人の世まもひかり我世と春かさもに

右　権大納言為光

君ゆくこと信のあまてこ者代のうこき

をこ乃ちかりをもちかりうこきもの為持

四十四番

危

右大臣

兎角人事にかゝる道理を治たしなし君臣の代のたがひ
右　傍　右近大将義政

神代より三種のうつし伝へきたりて今もうけつぐ君のこゝろ
危　勅尚書洪範篇洪書平秩東作治
世之法治和外抗言右辛三種神器我
朝世々双也天璽宝也玉鏡傍

四十八番　開白
危　持

代々の先帝の御ゆゑや君と臣道乃たる数とゝまるか

右　准后

うしろ手をうち和漢神武ゆゑもあと静る宝典治風
危　右同料　仁徳御歌

四十六番
危　傍　右宰相中将実雅

法をつくれる君をたゝえ君の代をくしうれたる神もまもりか
右　第六段言賢任

君と臣のあるひとの道のたゝしきをたゝえ
右辛きたる代をうらもあらしなすう道
乃ちあるのうちをみはくるとゝもといふ

所とまるうちまつまうくまるこころと
なしや左所こそ代と何ふとへし
こゝまなし

四十七番　入道前関白太政
尼お
霧の見ハ数限りつゝとひて粒右代と何ふとへし
右　拾大納言親通

天地の長く起てきとつゝ我大君代のゐるも
うたうきりあるを作る清るゐ為ともゐ清
のちゝまゝくゝまゝいへる千年ゐ清りへる

四十八番　尼清の修雅親
尼
あ川さゝ屋梅もゝ咲あゝ治まる代とひゝ
右　拾遺　拾遺都忠雅
我さゝれくゐひといつまゝ浦や濱のゝ家も松のゝ寿無
右きゝ乃ゝ咲ひ和ゝ代ゝのまゝこゝ代
ゝゝ作るゝゝ咲ゝゝゝゝ尼あゝさゝゝや
ゝゝゝ作るゝゝゝゝ和ゝ尼雅

四十九番　　右　　按大納言公綱

君やまつ　君うえるべきはるの花殺　　右勝　　第四大臣

へてをなく　君をひとりもをきて家代　　をもをきて家代

をはるをいしれ君はうつしけるしを面

をきて花をちるる風をうらみ侍べき

しや

五十番　　右　　雅康卿

きてをしむ　ひくををきて行の家代をも沼をしれぬ殺をのをる

右勝　　第大僧正義運

月日はへをるをや嘆をを君をはじをる世をの代を家ををもを

をを作ををはをしをきぬをを作ををを右月日

ををへをををやをを作ををををいををををて後の白

をををを後をを作をを可為勝

右廉正元年内裏歌合以古本書写以一本校正

国立公文書館 National Archives of Japan

群書類従巻第三百八

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan